

「空気を読む」という表現の社会心理学的研究

日高美咲*・小杉考司

An empirical study of the expression "Kuki wo yomu"

HIDAKA Misaki, KOSUGI E. Koji

(Received September 28, 2012)

キーワード：空気を読む，印象評定，ぼかし表現

問題と目的

近年，KY（空気が読めない）という略語がメディアで大きく取り上げられるようになり，2007年には流行語大賞にノミネートされた。このことばの流行に伴い，“空気は読めなければならぬものだ”という風潮が広がり，“どうやったら空気を読めるようになるか”を書いた文献が多く登場することになった。例えば内藤（2008）は，一人ひとりの声のトーンや表情といったシグナルをきちんと受け止めることが「空気を読む」ために必要であるとし，櫻井（2007）は，“自分以外のことに思いを向けること”で「空気を読む力」が磨かれるとした。

土井（2008）は，現代の学生達は絶えず場の空気を読みながら，友人との間に争点を作らないように心がけていると指摘する。これまで，親友とは，互いの対立や葛藤を経験するなかで，揺るぎない関係を作り上げていくものであると考えられてきた（土井，2008）。しかし，現代の若者たちは友人との対立をできるだけ避けようとし，そのための手段として「空気を読む」のである。現代の若者たちにとって，友人と上手く付き合っていくためには，「空気」の読み方を知っていることが望ましいといえる。「空気」の読み方を書いた本が多く出版されることになったのは，仲間との関係が一時的にでも揺らぐことを，極端に恐れてしまう昨今の若者（土井，2008）たちの需要があったからであろう。

ところが，「空気」の読み方についての文献が多い一方で，「空気」とは何か，という正体を突き止めようとしたものは少ない（鴻上，2009）。人々は，「空気」の正体がわからないのにも関わらず，その「空気」をどうにかして読もうとする。「空気」を読もうとするのであれば，「空気」とは何かを明らかにすることが優先されるべきではないだろうか。そこで本研究は，「空気」とは何であるか明確にすることを第一の目的とする。

今まで明確な定義がされてこなかった「空気」であるが，現代になってつくられたことばではない。「空気」についての最初の文献は，山本七平著『「空気」の研究』（山本，1983）である。『「空気」の研究』が出版されたのは1983年であり，若者ことばとしての“KY”が流行する四半世紀程前である。

『「空気」の研究』の中で「空気」は，“まことに大きな絶対権をもった妖怪”と例えられている（山本，1983，pp.19）。かつて人々は，脅威である「空気」に意志決定を拘束されていたのであり，

* 山口大学大学院教育学研究科

自ら進んで「空気を読む」ものではなかった。それでは、なぜ現代では「空気を読む」という表現がなされ、定着するに至ったのか。その理由を、社会心理学的観点から考察することを第二の目的とする。

本研究では、まず「空気を読む」ということばと類似した意味をもつことばとの印象の比較によって、その特徴を描き出す。

調査1

「空気を読む」と意味が類似していることばの中から、より似ていることばを明らかにし、調査2の調査紙に用いる項目を選出するため、調査1を行った。

【方法】

調査協力者 国立Y大学教育心理学コース所属の女子大学生2名

調査日 2011年7月13日, 14日

手続き 大辞林を参考に、「空気を読む」と類似した意味をもつことば、反対の意味をもつことばを合わせて29語挙げ (Table.1), 「空気を読む」を含めた計30語の一对比較を“非常によく似ている”から“全く似ていない”までの7件法で行った。なお、評定値は調査者1名と調査協力者2名, 計3名による話し合いによって決定し、多数決はとらなかった。

Table.1 類似語リスト

・引っ込み思案な	・自己中心的な	・暗黙のルール	・期待外れな	・独りよがりな
・ノリが悪い	・協調する	・同調する	・我慢する	・無個性な
・妥協する	・気を配る	・共感する	・以心伝心	・場を乱す
・人見知りな	・無頓着な	・無関心な	・不注意な	・無神経な
・無礼な	・鈍感な	・従順な	・孤高な	・敏感な
・冷静な	・目立つ	・頑固な	・異端な	

【結果と考察】

調査1は、調査用紙に用いることばを選出するとともに、多次元尺度構成法により作成された対象の布置を検討することを目的とした。評定値が似ているものを1, 似ていないものを7とした距離行列をもとに、古典的多次元尺度構成法をつかって対象の布置を求めた。分析にはR2.15.1のcmdscale関数を用い、次元数は2に固定した。

多次元尺度構成法により算出したことばの空間布置をFig.1に示す。

Fig.1より、「空気を読む」という表現に近く、調査対象者がイメージしやすいことばであると考えられた「気を配る」「協調する」「我慢する」「妥協する」の4つを、研究2の刺激として選出した。最も空間布置に近いものは「暗黙のルール」であったが、他の4つのことばと品詞が異なるため選出しなかった。

また、最も上にプロットされたものは「引っ込み思案な」、最も下にプロットされたものは「頑固な」であった。同様に、最も右にプロットされたものは「自己中心的な」と「孤高な」であり、その対極が「協調する」であった。このことから、空間の方向性として、縦方向は主張的か否かを意味し、横方向は自己中心的か否かを意味するものだと考えられる。つまり、図の下方方向にプロットされることばほど主張的な印象であり、図の右方向にプロットされるほど自己中心的な印象がもたれていることばであるといえる。その中で「空気を読む」ということばは、自己中心的でなく、あまり主張的ではないものであることが示された。

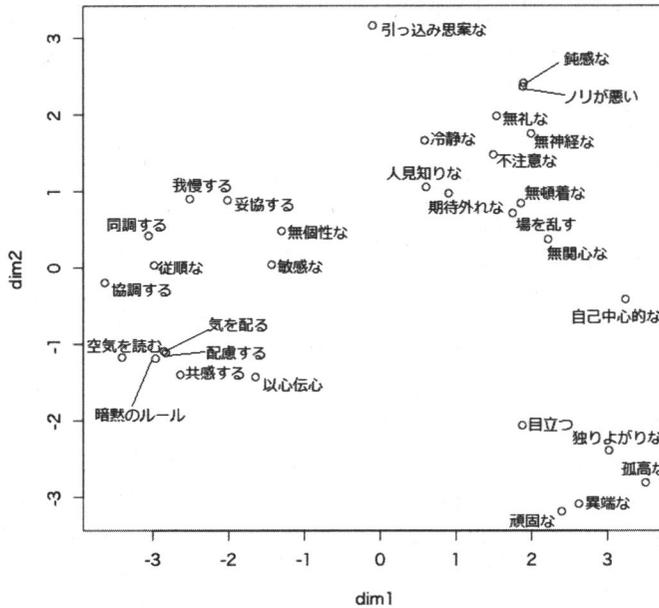


Fig.1 ことばの空間布置

調査2

「空気を読む」ということばに対する印象の特徴を、調査1によって選出されたことばとの比較によって明らかにすることを目的として調査2を行った。

【方法】

調査対象者 国立Y大学の学生99名（男性39名，女性60名）。平均年齢18.81歳。

調査日 2011年10月7日

調査用紙の作成 調査1の一对比較によって選出された「気を配る」「協調する」「我慢する」「妥協する」の4つと「空気を読む」を合わせた計5つのことばそれぞれについて、印象評定を求める調査用紙を作成した。調査用紙は、印象評定項目の形容詞対20項目を5件法で回答するもの（調査紙A）と、動詞対20項目を5件法で回答するもの（調査紙B）の2種類を準備した。形容詞対、動詞対は、調査1を参考に主張的か否かの要素、自己中心的か否かの要素を含むものとし、「思いやりのある一わがままな」「発する一受ける」等、独自に作成した。

手続き ことばの印象について回答を求める2種類の調査紙（A）、（B）を講義内で配布し、回答を依頼した。なお、調査紙（A）と調査紙（B）は調査対象者にランダムに配られた。調査紙（A）に回答したのは男性22名，女性24名，平均年齢は18.80歳であった。一方，調査紙（B）に回答したのは男性17名，女性36名，平均年齢は18.81歳であった。

【結果と考察】

ことばに対する印象について質問した形容詞対20項目について因子分析（一般化最小二乗法，プロマックス回転）を行った結果，2因子が抽出され，因子間相関は0.51であった。それぞれの因子は親愛因子，積極因子と名付けた（Table.2）。同様に動詞対20項目について因子分

析（一般化最小二乗法，プロマックス回転）を行った結果，3因子が抽出されたが，第3因子は「張る」のみであったため分析から除外し，改めて因子分析を行った。その結果，動詞対19項目においては2因子が抽出され，因子間相関は0.28であった。それぞれの因子は受容因子，主張因子と名付けた（Table.3）。

同じ因子にまとめられた形容詞の得点，動詞の得点それぞれを合計し，平均値を算出したものをTable.4，Fig.2に示す。

**Table.2 形容詞対による印象評定の
因子負荷行列**

item	親愛	積極	共通性
真面目な	0.81	-0.20	0.53
感じのよい	0.81	0.14	0.79
思いやりのある	0.78	-0.03	0.58
優れている	0.73	0.14	0.65
敏感な	0.66	-0.15	0.36
良い	0.60	0.36	0.70
好きな	0.58	0.29	0.60
親しみやすい	0.57	0.26	0.46
豊かな	0.49	0.27	0.45
複雑な	0.37	-0.32	0.12
おしゃべりな	-0.25	0.82	0.52
明るい	0.22	0.73	0.74
活発な	0.19	0.72	0.70
動的な	0.11	0.69	0.56
自由な	-0.21	0.63	0.30
強気な	-0.07	0.62	0.35
積極的な	0.34	0.59	0.67
外向的な	0.27	0.56	0.54
充実した	0.41	0.45	0.55
強い	0.15	0.30	0.16
累積寄与率	0.27	0.52	

**Table.3 動詞対による印象評定の
因子負荷行列**

item	受容	主張	共通性
つなぐ	0.85	-0.14	0.67
壊す	-0.82	0.33	0.62
整う	0.76	-0.21	0.53
生かす	0.73	-0.05	0.51
捨てる	-0.61	0.04	0.35
上げる	0.51	0.33	0.47
結ぶ	0.49	0.03	0.25
乗る	0.48	0.18	0.32
開く	0.48	0.44	0.55
追う	0.46	0.27	0.36
目立つ	0.06	0.75	0.59
言う	-0.23	0.73	0.50
飲みこむ	0.18	-0.73	0.49
発する	-0.03	0.70	0.48
押す	0.17	0.60	0.44
従う	0.29	-0.59	0.34
出す	-0.24	0.57	0.31
動く	0.41	0.53	0.57
流れる	0.20	0.29	0.16
累積寄与率	0.23	0.45	

Table.4 ことばの因子得点平均値（SD）

	親愛	積極	受容	主張
気を配る	4.18 (0.65)	3.47 (0.98)	3.77 (0.98)	2.69 (1.59)
協調する	3.96 (0.72)	3.76 (0.97)	3.97 (0.77)	2.76 (1.23)
我慢する	3.15 (0.61)	2.48 (0.99)	2.71 (1.38)	1.96 (1.29)
妥協する	2.73 (0.92)	2.35 (0.96)	2.61 (1.34)	1.97 (1.09)
空気を読む	3.74 (0.79)	2.97 (0.92)	3.33 (1.12)	2.14 (0.96)

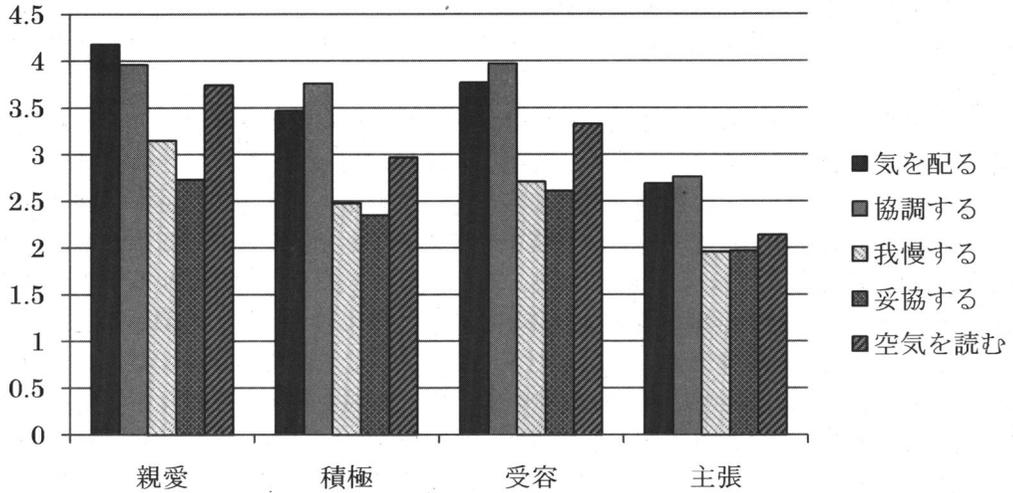


Fig.2 ことばの因子得点平均値

「空気を読む」ということばに対する印象において、因子得点平均値に特徴が見られたり、全てにおいて高かったり低かったりした場合、他のことばとは異なる点を明らかにすることが可能であると考えられた。ところが、「空気を読む」ということばに際立った特徴は見られず、因子得点平均値は、全て他のことばの中間に位置した (Table.3)。このように、「空気を読む」ということばは、他のことばと同様の印象をもたれているが、他のことばと比べ、極端な印象をもたれない特徴をもつことが示された。特に、積極因子得点の平均値は2.97であり、中央値3に最も近い因子得点であった。

総合考察

本研究の目的は、「空気」の正体を明らかにすることであった。

Fig.1より、「空気を読む」と最も近くにプロットされたのは「暗黙のルール」であった。ただし、「暗黙のルール」というのは名詞であり、対応するものは「空気を読む」ではなく「空気」であると考えられるため、「空気」が「暗黙のルール」と同様の印象を持たれているといえるだろう。「暗黙のルール」とは不文律のことであり、心の中で了解し合っているきまりであることから、「空気」は明言化されていないきまりであると考えられる。また、調査2では「空気を読む」ということばに対する印象が、他のことばと異なった特有のものではないことが示された。

以上のことから、「空気」は明言化することができないものであり、「空気を読む」ということばは、極端な印象をもたれないことが特徴であることが明らかになった。すなわち、「空気」をことばで定義することは不可能であり、他の表現ができないからこそ「空気」と名付けられたのだと考えられる。これは、「論理の積み重ねで説明することができないから「空気」と呼ばれている」とする山本 (1983) をデータによって裏付け、支持する結果である。

本研究の当初の展望として、「空気を読む」ということばでのみ表現される状況をつくり出すことで、「空気を読む」とはどのようなことか検討することも考えられた。しかし、「空気を読む」ということばで示される特有の状況は認められず、そのような実験的アプローチは不可能であると結論する。しかし、特有の状況が存在しないにも関わらず「空気を読む」という表

現が多く使われるようになったことは着目に値する。

以下、現代になって「空気を読む」という表現がなされ定着してきた要因を、社会心理学的観点から考察する。

現代の若者たちが、聞き手との衝突を避けるため、会話中に多用するようになったテクニックとして「ぼかし表現」がある。「ぼかし表現」には、「ワタシ的には」や「～みたいな」、「あ、そうなんだあ」というように、断定を避ける表現や、半独言・半クエスションと呼ばれる表現がある。現代の若者たちは断定を避ける表現を駆使することで自らの発言をぼかし、相手との微妙な距離感を保とうとする（土井，2008）。人が「空気を読め」と発言するときには、対象の人物に望んでいる行動や態度が明確に存在している。例えばそれは、調査1で「空気」の近くにプロットされた、我慢することであったり、協調することであったりする。しかし、対立を避ける若者は、「空気を読む」という表現を用いて、極端な印象を与えないようにしていると考えられる（Table.4）。このことから、「空気を読む」という表現も「ぼかし表現」の1つであると捉えることができる。そして、対立を避けながら相手へ願望を伝えることのできる便利さが、「空気を読む」という表現を現代で定着させた要因であると考えられる。

また、Fig.1より「空気を読む」が「自己中心的な」と大きく離れた場所にプロットされていたことから、「空気を読む」とき、自分の意見は重要視されないと考えることができる。山本（1983）は、“あのときの空気では、ああせざるを得なかった”という文章を多用するとともに、「せざるを得なかった」とは、「強制された」であって自らの意志ではないと述べている。また鴻上（2009）は、「空気」に敏感になると、自分の意見に従うのではなく、常に多数派の意見を気にして多数派の決断に従うようになると指摘している。これらは、「空気を読む」際、自分の意見は考慮しないという点で、本研究の結果と一致する内容である。

「空気を読む」ということばの印象評定において、積極因子得点平均値は5件法で2.97という、全ての因子得点平均値の中で、中点3に最も近い値をとった（Table.4）。これは、相手との対立は積極的に避けたいが、そのためには自分の意見とは異なった意見を採用しなければならないという葛藤を反映していると考えられる。つまり、選択する意見が自分の意見と反するときのみ、「空気を読む」と表現される。

「空気」は定義できないものではあるが、「空気を読む」ということばが使われ、「空気を読む」ことを重要視している人々がいることは事実である。今後は、どのような人が「空気を読む」ことを不得意だと感じているのか、特性と関連させた研究が考えられる。

また、本研究では、自分の意見と反する意見を採用するときのみ「空気を読む」と表現されることが明らかになった。この結果は、「空気を読む」ことで自分の意見を主張できず、ストレスを感じている人々の存在を示唆している。今後はそのような人々に対する臨床的アプローチの研究も考えられる。

引用文献

- 土井隆義（2008）. 友だち地獄 ——「空気を読む」世代のサバイバル, 筑摩書房.
 鴻上尚史（2009）. 「空気」と「世間」, 講談社.
 内藤諲人（2008）. 「場の空気」を読む技術, サンマーク出版.
 櫻井秀勲（2007）. ツキを呼ぶ「空気」の読み方, 海竜社.
 山本七平（1983）. 「空気」の研究, 文藝春秋.